

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13044

研究課題名（和文）近世江戸語の終助詞の意味と体系

研究課題名（英文）The Meaning and System of Final Particles in Early Modern Edo

研究代表者

黄 孝善（HWANG, HYOSUN）

東北大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：80828848

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：対話で用いられる終助詞は近世江戸語にもある。これらの終助詞は単独に用いられるものもあるが、複合的に用いられるものもある。また、このような終助詞は複合的に用いられる際には順番による承接が見られる。つまり、一定の体系があると言える。しかし、なぜ近世江戸語の終助詞が複合的に用いられる際に順番によって承接しているかについては明らかにされていない。終助詞はそれぞれの自分の固有の意味を持っていると思われる。そこで、本研究では、終助詞が承接する際に一定の体系を成している理由が終助詞が持つそれぞれの基本の意味が関係していると思って、終助詞の承接順による体系とそれぞれの終助詞が持つ基本意味との関係を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、文末に用いられている江戸語の終助詞が相互承接する際に承接順による一定の体系があるが、その承接順の体系と終助詞が持つそれぞれの意味との関係を明らかにした。また、承接順による江戸語の終助詞の体系を終助詞が持つ基本的な意味関係から検討を行い、江戸語終助詞の体系を一部修正を行ったものである。このように江戸語終助詞の体系を明らかにしようとする研究は日本語史にみられないもので、研究史上重要な位置を示す。また、現代語の終助詞の研究にも役に立つものであると思われる。

研究成果の概要（英文）：The final particle used in dialogue is also found in early modern Edo. Some of these final particles are used alone, while others are used in combination. Also, when such final particles are used in combination, there is an order. In other words, it can be said that there is a certain system. However, it is not clear whether the final particles of early modern Edo are accepted in order when they are used in combination. The final particle seems to have its own meaning. Therefore, in this study, we believe that the reason why the final particle forms a certain system when it is accepted is related to the basic meaning of each final particle, and clarified the relationship between the system of the final particle and the basic meaning of each final particle.

研究分野：人文学

キーワード：江戸語終助詞 複合助詞 承接 体系 対話調整

1. 研究開始当初の背景

江戸語終助詞の体系についての研究は田野村忠温(1994)と黄孝善(2020)がある。田野村忠温(1994)は、「個々の終助詞が全く放縦な振舞いを示すのではなく、いくつかの終助詞ごとに類を成し、それが全体として一つの整然とした体系を構成する形になっている」と言い、江戸語終助詞について承接順序があると指摘している。そして、江戸語終助詞をA類、「カ」「セ」「ゾ」「サ」「ワ」の終助詞が下接、その下にB類、「ヨ」「エ」「イ」「ヤ」の終助詞、最後にC類、「ノ」「ネ」「ナ」の終助詞が下接するとしている。また、同類に属している終助詞は互いに縦に連なる形で存在することができないとしているが、「ワ」と「サ」は「ワサ」の形があり、例外として共にA類として扱っている。これに対して、黄孝善(2020)は、田野村忠温(1994)の体系のなかで、例外として扱っている「ワサ」(A類)以外にも「ヤイ」「ヤヨ」のように同じB類のなかでも連なって承接する形があることを指摘し、江戸語終助詞の承接順を再調査して細かく分けたものである。承接順として、A類(「カ」「ゾ」「ワ」「ゼ」)の終助詞は他の終助詞よりいつも最先頭に位置するもの、B類(「ヤ」「ヨ」「イ」「サ」「ナ」)の終助詞は他の終助詞の前にも後ろにも位置するもの、C類(「ノ」「ネ」「エ」「ス」)の終助詞はいつも他の終助詞の後ろに位置するものとしている。また、B類の終助詞をより細かく分類している。

しかし、上記の田野村忠温(1994)と黄孝善(2020)の研究は、どちらも終助詞の承接による階層分類であるが、なぜ終助詞が表1と表2のような体系を持つか、また、A類、B類、C類と終助詞の意味関係について明確にされていない。

2. 研究の目的

終助詞はそれぞれの基本的な意味を持っていると思われる。終助詞が持つその基本的な意味により、他の終助詞と相互承接する際に一定の順序を持って承接し、階層(体系)を成していると考えられる。そこで、本研究では終助詞の階層性と終助詞が持つ基本的な意味との関係を調べて、終助詞の体系(A類、B類、C類)の意味関係を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)終助詞は対話のなかで現れるという特徴がある。そこで、近世江戸語の資料のなかで、当時の会話分かる「滑稽本」「洒落本」「人情本」を選択した。そのなかに江戸語で書かれていると思われる作品を選定した。その結果、「滑稽本」は「浮世床」(日本古典文学全集、小学館)など7作品、「人情本」は「春色梅兒誉美」(日本古典文学体系、岩波書店)など13作品、「洒落本」は「甲駅神話」(洒落本大成、中央公論社)など20作品、全部40作品を選定した。

(2)選定された作品を丁寧に読みながら江戸人による会話のなかで、複合用法に用いられている終助詞の用例を収集し、データ化した。対象終助詞は「か、わ、ぞ、ぜ、や、さ、よ、い、な、ね、の、え、す」という13種類である。

(3)次は、収集した複合用法の終助詞について、時期の調査対象の13種類の終助詞をそれぞれ基準の終助詞とし、その承接順番とその数を分析して黄孝善(2020)の終助詞の順番による体系と比較を行い、変わったものがないか確認を行う。

(4)順番による複合用法の終助詞の体系の確認が終わったら、体系のなかでのそれぞれの終助詞についてその基本的な意味から共通点があるかを検討する。例として、体系のなかで、終助詞のA類は「カ、ゾ、ワ、ゼ」があるがこれらの終助詞の基本的な意味を把握した上に、それらの終助詞が共通に持つ意味が何かについて考察する。その共通の意味が体系のなかでの終助詞A類の意味であり、複合用法に使われる時に一番前に位置する理由であると思われる。同様にB類・C類の終助詞についても同じ方法で進む。

(5)終助詞が持つ単独の基本的な意味は、既に研究されて意味が明らかにされた場合、その研究での意味を適用して用いた。しかし、まだ研究されていない「カ、イ、ノ、ヤ、ス」については本研究のときに収集された用例からその基本的な意味を明らかにして適用した。

(6)承接順による江戸語終助詞各終助詞の体系をそれぞれの終助詞の意味から検討を行って、終助詞の体系のなかでの位置について修正を行った。

4. 研究成果

今回、本研究での成果としては以下のものが取り上げられる。

(1)これまでの研究ではまだその意味が明らかにされていない終助詞「カ、イ、ノ、ヤ、ス」の5種類の終助詞についてその基本的な意味を明らかにした。以下はその意味である。

「カ」は、話し手は、自分がおかれている状況、あるいは、入っている情報について自分

側に納得できないという不確かさが生じ、それを相手に示す

「ヤ」は、話し手は、自分の知識や経験を相手に伝えて、相手がそれに気付くようにしていることを示す

「イ」は、話し手は、おかれている状況が自分にとって思ってもいなかったことが起きているという意外性を示している

「ノ」は、話し手は、おかれている状況について新たに認識を行っていることを示す

「ヤ」は、話し手は、自分の知識や経験を相手に伝えて、相手がそれに気付くようにしていることを示す

「ス」は、自分が今述べていることが正しいものであると相手の認識を改めようとしている

(2)終助詞が複合に用いられる際に承接する位置関係を示す終助詞の体系(表1、黄2020)を分析された単独の終助詞の基本的な意味を元にして、一部修正を行うことができた(表2)。

表1.黄孝善(2020)の江戸語終助詞の体系

分類	終助詞
A類	カ ゾ ワ ゼ
B1類	ヤ
B2類	ヨ イ サ
B3類	ナ
C類	ノ ネ エ ス

表2.終助詞の意味からみた江戸語終助詞の体系

分類	終助詞
A類	カ ゾ ワ ゼ
B1類	ヤ
B2類	ヨ イ サ ス
C1類	ナ
C2類	ノ ネ エ

(3)表2の終助詞の意味からみた江戸語終助詞の体系で、それぞれ分類されたA類、B類、C類の終助詞の共通の意味を明らかにした。

A類の「カ」「ゾ」「ハ」「ゼ」は、話し手は「おかれている状況(情報)について新しく認識したものを示している」

B類の終助詞「ヤ」「ヨ」「イ」「サ」「ス」は、「話し手は、伝えている情報が自分側にあるものとして示している」

C類の終助詞「ナ」「ネ」「ノ」「エ」は「話し手はおかれている状況(情報)を自分のものとしてまだ受け入れていないことを示している」

以上が、複合用法に用いられている「近世江戸語の終助詞の意味と体系」について明らかにしたもので、本研究の研究成果である。

参考文献

田野村忠温(1994)「終助詞の文法 江戸語資料に見る終助詞の体系性」『日本語学』13(4)、pp.94-112、明治書院

黄孝善(2020)「近世江戸語終助詞の階層性と体系」『国語学研究』59、pp.414-429、東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大木一夫、甲田直美	4. 発行年 2024年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 614
3. 書名 日本語変異論の現在	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------